根管ニ適合依リテ石膏咬合印象ヲ採得ス。

次ニ其ノ石膏咬合器ヲ以テ^{●●●●●●●●}ダーミーノ調製ニ進ム、先ヅ撰擇セル「ガスリー」陶齒ノ唇面ヲ模型上ノ齒齦面(唇面)ニ當テ(此ノ際模型ノ唇面ヲ僅カ削除スルヲ可トスソノ理ハ口腔内固定ノ後陶齒基底面ノ唇面ト齒齦面トノ隙ヲ生ズル事ナシ)、隙ヲ生ゼザル様陶齒基底ヲ形成シ唇面及ビ隣接面並ビニ對合齒トノ關係ヲ檢シ合致スレバ「ガスリー」齒冠ノ隣接面ノ原溝ヲ約二倍位ニ深メ陶齒基底部ノ蠟原形ヲ作り之ヲ鑄造ニ依リ金又ハ白金ノ所要金屬基底ニ換ヘル、以上ニ依リ出來タル金基底部ニ「ガスリー」齒冠ヲ試適後適當ナル位置ニテ「ステッキワックス」ヲ以テ連結シ陶齒ヲ除去後鑲着ヲ行ヘバ完全ナル「ガスリー」陶齒ノ複合架工義齒ヲ得、次ニ陶齒ヲ「セメント」ニ固定シ研磨後患者ノ口腔ニ固定ヲナス。

此ノ方法ニ依ル時ハ陶齒ノ熱處理ヲ行ハザルヲ以テ破壊スル事殆ドナシ、若シ一部陶齒ノ破損ヲ生ゼシ場合ニハ其破片殘渣物ヲ除去シ印象(モデリング)ヲ採得シ之ニ依リテ「アマルガム」陽型ヲ作り「ガスリー」齒冠ヲ撰擇後適合スル様形成終了セバ之ヲ該欠損部ニ「セメント」固定ヲ行ヒ得、即チ口腔内ニテ陶齒欠損ノ修理ヲナシ得ルヲ以ツテ最モ簡單ニシテ速ニ且ツ患者經濟負擔ノ最モ少ナキ理想的ノモノト信ズ。

齒科領域ニ於ケル肉腫ノ一例 (二圖入)

松 本 隆 治

Ein Fall von Sarkom auf dem Gebiete der Zahnheilkunde.

Von

Dr. Ryuji Matsumoto. (Fukuoka.)

Mit 2 Textabbildungen.

患 者

姓名 中路某 職業 料理人、大酒家 年齢 六十八歳 遺傳 ナシ。

初 診

昭和七年三月二十三日。

主 訴

下顎右側智齒ヨリ第一小白齒ニ至ル些少ノ動搖極ク輕キ鈍痛咀嚼時ノ不快ヲ訴フ。

視 診

口腔ハ全般ニ不潔ニシテ齒頸部ノ如キニハ食物ノ殘渣等ヲ留ム。齒石ハ齒頸部ヲ被ヒ齒牙ハ褐色ヲ呈シ咬合面ハ全部磨耗シ偏平ニシテ咬頭ヲ認メズ、齒齦ハ退縮シテ暗緑紅色ヲ

呈シ呼氣ハ惡臭アリ。

觸 診

齒牙ハ僅カニ動搖スルモ打診反應ナシ、齒齦ヲ壓スルニ稀薄ナル膿様物ヲ洩ラス。壓痛ナシ齒牙ニ死齒及ビ齶蝕ヲ認メズ。特別ノ齒科的診療ヲ認メザルガ故ニ齒石ヲ除去シ、多分齒石ノ爲ニ齒齦ヲ齒根膜ヲ刺戟シテ輕キ充血ノ結果齒牙ノ動搖セルモノト思ヒ、ソノ儘除石清掃處置シ歸宅セシム。然ルニ十週間位シテ後再來シテ外頰部ノ腫脹シタル爲再診ヲ乞フ、故ニ注意シテ視ルト口腔内齒牙ノ關係ハ前ト大シタ變化ナシ、然ルニ外頰部ニハ小鶏卵位ノ腫脹ヲ認メマス、其起根部ト想ハレマス所ハ下顎骨顆狀突起直上部ト想ハレマスソレヨリ漸次下方ニ向ヒ増大シ下顎骨體ノ中程ニ止ツテ居リマス、腫脹ハ硬性デ可動シ發赤自覺的ノ疼痛共ニ覺エズ、體溫ハ 37 度 6 分附近組織ニハ索狀物及ビ淋巴腺ノ腫脹ヲ認メズ壓痛ナク骨體ニ癒着ナク、附近組織ニ炎症ノ原因ト思ハレルモノモ全然認メマセン。

右ニ依リ考ヘルト全然炎症性ノモノトモ考ヘラレズ、ソノ發育ノ狀態ガ急速デ自覺症狀ニ乏シク壓痛ナク發熱ナク附近ニ炎症ノ原因モ認メズ、ソノ硬度ガ纖維塊ニ觸レル感ジガ致シマスノデ、之ハ全然炎症性ノモノニ非ザル事ト診斷致シマシタ。然ラバソノ腫脹ハ何レヨリ來ルカ第一ニ疑ハレマスノハ、前述ノ症狀ヨリ推斷シマスレバ、惡性ノ腫瘍トヨリ診斷ノ致シ様ガ御座居マセン、然シテ發生部位ト淋巴腺ノ腫脹ガナイ所ヨリ見ルト癌腫トモ思ハレマセズ、所謂胎生組織ノ性狀ヲ有スル肉腫ト診斷スルヨリ他ニ考ヘ様ガ有リマセンノデ患者ニ之ハ自分ガ受持ツベキ病氣デナイカラ、適當ナル外科醫ニ診斷ヲ乞ハレタ方が宜シカラント何等ノ處置ヲナサズ歸宅サセマシタ、然ルニ二三日シテ又來院シ某外科醫ニ診察ヲ乞ヒタルニ下顎ノ第二大臼齒ノ齒根ヨリ起リタル腫脹ナルガ故ニ、齒科醫ニテ第二大臼齒ヲ拔去シ含嗽ト冷卷ヲ施セバ漸次治癒スルトノ事故第二大臼齒ノ拔去ヲ乞フテ止ミマセン、然シ私ノ考ヘニテハ齒牙トノ關係ハ全クナキモノト考ヘル故、拔去ノ必要無キ事ヲ申シキカスレド聞キ入レズ止ムヲ得ズ指定ノ齒牙ヲ拔去シマシタ、創口ハ治癒スト雖モ腫脹ハ何等治癒的變化ヲ來サズ漸次増大スルモノナル故外科醫ニ再診ヲ乞ハシメタルニ前同様ノ診斷ナル故止ムヲ得ズ數日ヲ經過セリ、然ルニ患者ハ非常ニ不快ノ感ジ強ク何トカ方法ヲ講ジテクレト迫ルノデ他ノ外科ノ大家ヲ指名シ、ソノ診斷ヲ乞ヒタルニ全ク前ノ外科醫ノ診斷ガ誤診デアリ、且完全ナル肉腫デアル事ヲ診斷セラレ即時手術ノ必要ヲトカレ、六月ニ外科醫ノ手ニ依リ摘出手術致シマスニ摘出時立會致シマシタガ、ソノ發生ノ部位ハ窩狀突起附近ヨリ發生シ下顎第二大臼齒上部ノ骨體ニ僅カニ癒着ヲ認メマシタノデ、骨體ノ一部分モ切除致シマシタ、手術後漸次快方ニ向ツテ居リマシタガ、創口モ治スル頃ニ至リ患部ノ智齒ヨリ犬齒部ニ至ル齒牙ガ僅カニ舌側傾斜ヲナシタル感アリ。

咀嚼ニ不自由ヲ感ズル故齒牙ノ治療ヲナシ、咀嚼ヲ可能ナラシムル様トノ求メニ依リ齒

牙ノ診斷ヲナスニ幾分舌側傾斜アリ、下顎ハ頰側咬頭縁ノミニテ咀嚼ノ傾向アル故拔髓シテ咬頭形成ヲナシ咀嚼ヲ完全ナラシメント圖リタルニ、施術中舌側傾斜激シクテ咬頭ノ形成不可能ナルヲ認メ、ソノ原因ノ何レニアルカヲ探查セシニ下顎犬齒部ノ下方ニ僅カニ暗綠色ノ腫脹カト思ハレル部ヲ發見シタリ、故ニ肉腫ノ轉移ニ非ラザルカト思ヒ外科醫ニ圖リタルニ全ク轉移セシモノト認メ再手術ヲナス事トナリ、七月二日ニ再手術ヲナシ下顎骨體ノ大部分ヲ切除セリ、切除時ノ骨體ノ變化ヲ見マスニ骨體ハ崩潰セラレ膨弱トナリ丁度熱シタル陶焼ヲ水中ニ投ジタルガ如キ状態ヲナシ居タリ。

右ニヨリ推斷致シマス、最初診斷ニ齒牙ニ自覺的不快感起リマシタルハ、外頰部ニ腫脹ノ現ハレタル以前ニ既ニ骨髓ニ病根進入シ、骨體齒根膜等ニモ多少ノ變化ヲ來シ、齒牙ノ腫起ヲ起シ居リタルニハ非ザルカト思ハレマス、尙最初手術後ノ齒牙ノ變化ハ腫大崩起ニ依リ齒根部ニ動搖ヲ來セン結果ニ外ナラズ、齒科醫ハ此ノ邊最モ注意スベキ點ニハ非ザルカト思ハレマス。

第一 注意ス可キハ單ニ齒根膜ノ充血症狀ノ如キモ輕々ニ見逃サヌコト。

第二 齒牙ノ動搖ノ如キモ數齒連續シ來ル場合等ハ深遠ナル注意ヲ拂ヒ、年齡附近組織ニモ細深ノ注意ヲ拂フコトガ必要ト思ヒマス。

最近私が經驗シマシタ一例ヲ御話シ致シマシテ先輩諸氏ノ御教示ヲ乞フ次第デアリマス。摘出致シマシタ腫瘍ト顎骨切除後ノ寫眞ヲ御高覽ニ供シテ居リマスカラ御覽下サイマセ。

第一圖
肉腫ノX線像ヲ示ス

第二圖
肉腫
摘出
後

中空鑄造架工齒ノ一調製法 (四圖入)

九州齒科醫學專門學校附屬醫院(院長 沖野教授)

補綴部

松本 洋一

Aus der Prothetischen Abteilung der Zahnärztlichen Hochschule
zu Fukuoka. (Leiter: Prof. Setsuso Okino.)

Eine Herstellungsmethode der gegossenen Zwischen-Hohlkrone.

Von

Dr. Yoichi Matsumoto.

Mit 4 Textabbildungen.

中空架工齒ノ調製法ニハ種々ナル方法アリ。又鑄造法ニ依ル方法モ色々ノ術式ヲ見ル概シテ述ブレバ鑄造法ハ鑲着法ニ比シテ其ノ操作ニ於テ複雑ナル點ヲ多ク見ル。

此處ニ述ブル鑄造法ニ依ル調製法ハ鑲着法ニ比シテ簡單ナリト信ズ。

假リニ上顎第一大臼齒ノ缺損セル部ニ工齒ヲ調製セントス。

先ヅ支臺齒トナル金冠ノ調製ハ通常ノ方法ニ依リ、即チ鑄造法、鑲着法何レニ依ルモ可ナリ。金冠ノ調製終ラバ印像採得石膏模型ノ調製ハ通常ノ如クナス。

模型調製終ラバ缺損部ニ於ケル間隙ヨリモ稍々小ナル即チ 30 番乃至 31 番丈ケ小ナル和製有孔陶齒ヲ求メ概略對合關係ヲ適合スル様削合ス。